

「国連 ESD の 10 年」後の環境教育推進方策懇談会第 2 回会合における
各委員の発言の概要

1. 資料3 持続可能な開発のための教育（ESD）とは何かをどのように伝えたら良いか

- ESD と環境教育との差分とは。（実平委員）
- 環境教育と ESD の違いはということの結論がない。絶対正しい解があるわけではない。（川嶋委員・小澤委員）
- 対話とか談議を通してよりよい未来をつくっていくこと。（小澤委員）
- 持続可能な発展、持続可能な開発、持続可能性とかの言葉自体が正しく伝わっていない。定義のとおりを考えている人は少ないのではないか。（関委員）
- 企業では捉え方が違っているので、持続可能性についてわかりやすく説明をする必要がある。（関委員）
- ESD により環境教育は、いろんな課題を解決するための能力をどうするのかという見方も入ってきた。（棚橋委員）
- 持続可能な社会をつくっていくためには、行動というアクションを起こすための力が必要だという視点が ESD には明確にある。（棚橋委員）
- ドイツでは ESD コンピテンシーという言い方を使って、ESD によって育まれる力を明確に打ち出している。（棚橋委員）
- 子ども主体にどう学ばせるかということを考え、小・中・高で積み上げていくことが、しっかりとした能力・態度の育成なり、それが持続可能な社会づくりになっていく。（棚橋委員）
- 小学校での総合的な学習の時間は、随分と工夫されて展開できているが、中学校では、実践例ががたっと落ち、高校になってくると、ほとんど見えにくい状況である。（小川委員）
- ESD の目指すべき社会の方向性、関係性を整理しないと、総合の学習の時間と ESD では、環境という切り口で、課題をつなぐというような構成で終わってしまうことが危惧される。（小川委員）
- 環境教育というのは、単なる環境問題についての知識を学ぶものではなくて、一人ひとり個人の行動変革と社会の変革までを視野に入れたもの。（小川委員）
- ESD の持続可能な社会は、総合的な学習の時間の生きる力という部分の接合を整理しないと、一般にはわかりづらい。（小川委員）
- キーワードは行動、知るだけではなくて、行動が変わらなければならない。（川嶋委員）
- 政治家、行政官、企業者それぞれに求められる行動がある。（川嶋委員）
- ESD は、ここから先をどうするのかということを議論するための大人の常識みたいなところではない。（川嶋委員）

2. 資料4 本懇談会において重点的に議論する事項

- ESD は、基礎科目と応用科目あるいは専門科目というのがあると思う。教育はあくまでも手段で何をやるかというようなところが重要。（実平委員）
- サステナブル・ディベロップメント（持続可能性な開発）は、レベルはさまざまだが、グランドデザインを決めた上で、物事を進めることが重要。（実平委員）
- 今後のあり方としては、多分野からどれだけの知識や知恵を集めて統合的な判断ができるかというようなことが ESD にとって大きな切り口。（小川委員）
- ESD を議論していく上で社会像を議論していくということがこれまで以上に重要。（小川委員）

- ESD は単なる知識伝達型の教育ではなく、探求的な学びで、構成概念とか、つけたい能力というところが非常に大事。(小澤委員)
- ESD 投資とか、環境社会ガバナンスを投資判断にどう組み入れるのかということが、特に欧米、特にヨーロッパを中心に非常に盛んになってきている。(関委員)
- 長期的に考えたときにどういう投資判断をすべきか、環境とか社会の問題とか、あるいは、自然災害に関するリスクだとか、いろんな要素を投資判断の中に入れるべき。(関委員)
- 日本も含めていろんな国で、思考力とか判断力とか表現力といった力が将来にわたって必要なものになる。(棚橋委員)
- 問題解決をしていく力というものが必要で、そのための長い時間をかけた訓練が必要。(棚橋委員)
- 日本全体での価値観、価値意識といったものをしっかり持つ必要があり、そのためには、総合的な学習の時間はしっかり取り組んでいるかどうかということを検証する必要があると思う。(棚橋委員)
- 西宮で、保育所と幼稚園の先生たちで ESD の研究会をやり、今年度中に、乳幼児のための ESD というサポートガイドを出す。(小川委員)
- 根っここのところの ESD という教育の部分をどんなふうに体系化していくのか。そのグランドデザインが必要だと思う。(小川委員)
- ESD はすごく難しいような気がするが、何をどう取り組むと、結果がどうなるのかということを知りやすく表現されると、そういうことなんだと気づき、自分もこうしてみたいというふうになり、多様な ESD につながっていくのではないか。(さかなクン委員)
- みんなが見てみたいとか、自分もこういう表現してみたいなというふうに思える ESD がどんどん広がると、もっと楽しくなり、まさに ESD になっていくのではないかなと思う。(さかなクン委員)

以上